

児童発達支援事業所における自己評価結果（公表）

公表：令和6年 5月 20日

事業所名 東京家政大学 児童発達支援事業所 わかくさ

		チェック項目	はい	いいえ	工夫している点及び、課題や改善すべき点を踏まえた 改善内容又は改善目標
環境・ 体制整備	1	利用定員が指導訓練室等スペースとの関係で適切である	100		1日定員10人を5名ずつのグループで療育を行い、十分なスペースを確保している。
	2	職員の配置数は適切である	100		規定以上の人数で療育にあたっているが、利用人数や子どもの状況により療育に参加するスタッフの人数を調整している。
	3	感染症対策は十分であるか	100		入室後の手洗いの徹底、おもちゃの払拭等、丁寧に感染防止に努めている。
	4	生活空間は、本人にわかりやすく構造化された環境になっているか。また子どもの活動に合わせた空間となっているか	100		玩具を選びやすいよう、何があるか見えるように配置、療育中は活動に集中できるよう布で覆うようにするなどの配慮をしている。
業務改善	5	業務改善を進めるためのPDCAサイクル（目標設定と振り返り）に、広く職員が参画している	100		日々の療育が始まる前の打ち合わせ、終了後の振り返りを必ず行い、目標の達成度、次への課題を確認している。
	6	職員の資質の向上を行うために、研修の機会を確保しているか	100		研修の予算、時間の確保を十分に行い、希望する研修に参加できるよう体制を整えている。
	7	トラブルがあった際、情報を共有し再発防止につとめているか	100		原因、今後についての配慮点を全員で考え、まとめたことを利用者にも報告している。
適切な 支援の 提供	8	アセスメントを適切に行い、子どもと保護者のニーズや課題を客観的に分析した上で、個別支援計画を作成しているか	100		保護者と相談する時間を調整して設け、聞き取りを丁寧に、それを共有しながら、スタッフ全員で支援を考えている。
	9	子どもの適応行動の状況を把握するために、標準化されたアセスメントツールを使用しているか		100	アセスメントは保護者の聞き取りのみで行っている。今後においては、どのようなツールが効果的なのかを吟味し、取り入れていくについても検討していきたい。
	10	個別支援計画には、子どもの支援に必要な項目が適切に選択され、そのうえで、具体的な支援内容が設定されているか	100		計画にむけて提供する活動が具体的に行えるよう、スタッフ全員で内容を考えている。また、提供後についても、それがその子の姿に合っていたのかの検証も行っている。
	11	個別支援計画に沿った支援が行われているか	100		個々の課題を共有し、同じ方向で支援が行われるよう意見交換をしている。また、活動の様子を共有し、方向性が合っているのかの検証も行っている。
	12	活動プログラムの立案をチームで行っているか	100		グループ担当が作成した計画をスタッフ全員で確認し、具体的な方法や配慮点も共有している。
	13	活動プログラムが固定化しないよう工夫しているか	100		月で活動計画を作り、保護者や子どもと共有している。定番で楽しめる活動に加え、様々な経験ができるようにバラエティ豊かな内容を考えている。
	14	子どもの状況に応じて、個別活動と集団活動を適宜組み合わせる個別支援計画を作成している	100		個別療育は年長児のみ公認心理師が行っている。
	15	支援開始前には職員間で必ず打合せをし、その日行われる支援の内容や役割分担について確認している	100		療育開始前に必ず打ち合わせを行い、内容や準備物の確認、役割分担、予想される子どもの姿と対応など、確認してから療育にあたっている。
	16	支援終了後には、職員間で必ず打合せをし、その日行われた支援の振り返りを行い、気付いた点等を共有している	100		カンファレンスがとても重要と考え、その日の活動の様子、個々の姿を共有し、次回につなげている。
	17	日々の支援に関して記録をとることを徹底し、支援の検証・改善につなげている	100		その日に関わった子の情報に加え、カンファレンスで出た内容、また他のスタッフが見た姿からの評価など、多方面からの記録を残し次回につなげている。
18	定期的にモニタリングを行い、個別支援計画の見直しの必要性を判断している	100		定期的なモニタリングを行い、保護者のおもいに寄り添いながらも、今の子どもの姿に合う個別支援計画を作成している。	

関係機関や保護者との連携	19	障害児相談支援事業所のサービス担当者会議にその子どもの状況に精通した最もふさわしい者が参画している	100	担当者会議が行われたことがない。今後においては、相談支援事業所に働きかけ、より個々にあった支援ができるよう実施を求めていく。
	20	関係機関と連携した支援を行っている	100	幼稚園・保育園を見学に行き、園と情報共有を行うなど積極的に連携を図っている。
	21	移行支援として、保育所や認定こども園、幼稚園、特別支援学校（幼稚部）等との間で、支援内容等の情報共有と相互理解を図っている	100	要請があれば入園する幼稚園・保育園へ情報提供をしながら、新しい環境への滑らかな移行につなげている。
	22	移行支援として、小学校や特別支援学校（小学部）との間で、支援内容等の情報共有と相互理解を図っている	100	就学支援シート等の利用を保護者に進め、就学後の支援につながるように、情報提供に努めている。
	23	他の児童発達支援センターや児童発達支援事業所、発達障害者支援センター等の専門機関と連携し、助言や研修を受けている	100	専門機関主催の会議には積極的に参加し、情報共有している。しかし、併用している事業所との連携はできていないので、働きかけていきたい。
	25	関係機関での会議等へ積極的に参加している	100	区主催による、発達ネットや事業者連絡会に積極的に参加し、情報共有に努めている。
	26	日頃から子どもの状況を保護者と伝え合い、子どもの発達の状況や課題について共通理解を持っている	100	保護者とのコミュニケーションを積極的に取り信頼関係の構築を図った上で、子どもの姿を共有し、課題を見出している。
27	保護者の対応力の向上を図る観点から、保護者に対して家族支援プログラム（ペアレント・トレーニング等）の支援を行っている	100	保護者会等の日程を年間で周知し参加を促している。また、保護者向けのセミナーを多方面な内容で企画し、より良い親子関係の構築に努めている。	

保護者への説明責任等	28	運営規程、利用者負担等について丁寧な説明を行っている	100	契約時に、重要事項説明書の読み合わせをしながら説明を行っている。書類は持ち帰り再読していただき、不明な点は再度説明する旨をお伝えしている。
	29	「個別支援計画」を示しながら支援内容の説明を行い、保護者から児童発達支援計画の同意を得ている	100	療育の前後の時間か日中、保護者のみ来室いただき、説明の時間を設けている。内容を丁寧に説明し、同意のサインをいただいている。
	30	定期的に、保護者からの子育ての悩み等に対する相談に適切に応じ、必要な助言と支援を行っている	100	相談があればいつでもお受けすることができることは伝えているが、自分から言い出せないようであれば、こちらからお声掛けをして話をする機会を作ってみたいと考えている。
	31	父母の会の活動を支援したり、保護者会等を開催する等により、保護者同士の連携を支援している	100	保護者同士の意見交換や縦のつながりの構築を目指したいと考えている。学生の手を借り、全グループで遊んだり、情報共有したりできる時間ももうけていきたい。
	32	子どもや保護者からの相談や申入れについて、対応の体制を整備するとともに、子どもや保護者に周知し、相談や申入れがあった場合に迅速かつ適切に対応している	100	要請があった場合は速やかに対応するが、気軽に相談できる体制づくりも考えていきたい。
	33	個人情報の取扱いに十分注意している	100	保護者あての配布物は、名前入りの封筒に入れてお渡しするが、誤配を防止するため中身はダブルチェックで確認している。また、個別の書類等は鍵のかかる書庫に保存しており、事業所からの持ち出しはしていない。書類は定位置に保管し、終了時に存在を確認している。
非常時等の対応	34	障がいのある子どもや保護者との意思の疎通や情報伝達のための配慮をしている	100	療育の中で積極的に保護者と話そうにしているが、悩みを共有できたり助言しあえる場はなかなか持てないので、グループごとのベアトレで親睦を深めながら親同士のつながりにつなげていく。また、縦のつながりの構築にも取り組んでいく。
	35	緊急時対応マニュアル、防犯マニュアル、感染症対応マニュアル等を策定し、職員や保護者に周知するとともに、発生を想定した訓練を実施している	100	内容を周知できるよう、ファイリングし、いつでも閲覧できるようにしてある。また、感染症対策として、下痢おう吐の処理の仕方や、救急車の呼び方などについても訓練していく。
	36	非常災害の発生に備え、定期的に避難、救出その他必要な訓練を行っている	100	4月に全グループで避難時の対応について話し机上訓練とした。あらゆる想定での訓練を実施し、非常時に備えていく。
	37	ヒヤリハット事例集を作成して事業所内で共有している	100	ヒヤリハットの用紙を作成し、何かあったらすぐに記入しスタッフ全員で情報を共有し再発防止に努めている。